

小学校の事例 西区 西園小学校

育てた花をまちに設置することで、まちと自然と自分たちのつながりを築く花いっぱい運動。

一人一鉢の花育から自分たちのまちとのつながり自然のきびしさとすばらしさを学ぶ。栽培した花を街中に置くことで目に見えた実感を得られ継続した活動へ。



はじまり 伝統の「一人一鉢」の取組を 西野・西町に広げよう!

平成23年度に開校30周年を迎える本校は、10年前から、全校児童が「花のようなほほえみがいっぱいの学校に!」という思いを込めて「一人一鉢」の花を育てる活動をはじめた。

1、2年生で花を咲かせる楽しさ、難しさを学んだ3年生は、社会科や総合的な学習の時間の「まち探検」とおし「もっときれいな、明るい、楽しいまちにするために」という思いをもって、地域の施設や店舗に自分たちで交渉して、花を置かせていただいている。



子供たちが育てた花

内容 みんなに喜んでもらうため 置く場所を決め きちんと世話しよう!

5月。校区内をやさしい自然にあふれたまちにするために、ペチュニア、マリーゴールド、サルビア、ナスタチュウムなどが咲いた状態の写真から、どんな花を育てたいかを考え、花の種類を選んだ。

花を育てるためには、育て方や特性を知り、責任をもって継続的に世話をしなければならない。花の生命を維持するために、子供たちは、天候や気温などに応じて、水やりをしたり、鉢の置き場所を変えたりと、細やかな気配りが必要なことを理解する。地域にもっていく前に、美しく強い花を咲かせようと世話をするうちに、花に対する愛情も芽生えてくる。

7月。そうして育てた花をいよいよ地域にもっていく。まず、花を置く場所を決める。どこに置くのか。どうしてそこに置きたいのか。

どのように許可をとればよいのか。いつ置きにいくか。置いた後の世話はどうするのか。夏休みの世話はどうするのか……。考えなければならないこと、決めなければならないことがたくさん出てくる。

病院、ケアセンター、保育園、飲食店、公共施設など、花を置きたい場所は十数カ所になった。子供たちは、置きたい場所ごとにグループをつくり、相談し、設置交渉を行った。花に願いを込めて愛称をつけたり、花言葉を添えたりしたグループもあった。そして、子供たちは、まちに花を飾った。

9月。置かせていただいた方に感謝の気持ちを表した手紙を携え、花の回収に向かった。地域の人たちは、温かく子供たちを迎えてくださった。

効果 小さな一鉢の花から まちの環境に働きかける意識が高まる

本実践は、3年生の総合的な学習の時間として展開される。子どもが獲得した学びの力は、次の3つの力である。

1.情報を活用し、豊かに表現する力

花の育て方を調べたり、花を置かせてもらう場所を交渉したりする活動を通して、調べる手段や方法、伝えたい相手への連絡のとり方を考え、適切に判断、行動することができる。

2.自然や生命を尊重し、活動を継続する力

西野・西町をよりよいまちにするために、自分が育てると決めた花を、責任をもって育てる活動をとおして、生命を維持するためには、たくさんのサポートが必要であることと、どんなに小さくとも自然には、人々の心をやさしくする力があることに気付く。

3.自分たちの住む地域に愛情をもつ

自分や友だちの花が置かれた場所に心を配り、花や置かせてくださった方々とかかわる中で、地域への愛情を育むことができる。



施設の方へ花を手渡し



花の回収時にお礼の手紙を贈る

今後 環境教育は 様々な視点からの切り込み口がある

「自分たちの花でまちをかざろう」の学習は、「環境教育」と同時に、「地域学習」であり、「生命尊重学習」である。一口に環境教育と言っても、そこには、さまざまな視点からの切り込み口がある。

本実践でいうならば、「地域のために」が、「地域のおかげで」に変わっていく『環境教育』。「命を育てる」をベースに「命でつながる活動」をつくる環境教育」ということができる。

また、花をとおした地域とのコミュニケーションという視点からは、次のようなキーワードが浮かび上がる。「かわり」「挨拶」「交流」「感謝」「お礼」……。

こうしたことを教師がはっきり意識し、より一層探究的な学習となるよう指導することが、学習に深みと広がりを生むことになると考える。

広げよう
つなげよう
環境学習の輪



実施校から
メッセージ

「一人一鉢」は、生活科の学習で取組まれている学校が多いのではないのでしょうか。また、一人一鉢ではなくとも、どの学校でも校地内には、たくさんの花が植えられているのではないのでしょうか。子どもにとって花をはじめとした栽培活動は、環境教育の第一歩。育てたり調べたりしていく中で、全員が「花博士」と言えるくらいに花について詳しく語れるようになってくると意欲が高まります。「夏休み、家族も巻き込んでのお世話活動を通して、花や自然について子どもとの話題も増えました」